

SMOKERS' STYLE COMPETITION 2006

SmokerとNon-Smokerの共存を目指して

テーマ座談会

いかに煙を分けるか。分煙のあり方を問う

出席者 古谷誠章 (早稲田大学教授) 妹島和世 (慶應義塾大学教授) 西沢大良 (西沢大良建築設計事務所代表)
六鹿正治 (日本設計代表取締役社長) 佐藤英治 (イーエスアソシエイツ代表) 西澤省悟 (日本たばこ産業株式会社代表取締役副社長)
栗田利昌 (日本たばこ産業株式会社たばこ事業本部社会環境推進室長)

たばこを取り巻く環境と社会への取り組み



西澤省悟 (にしざわ・せいご)
1948年生まれ / 1971年北海道大学農学部卒業 / 1971年日本専売公社入社 / 現在、日本たばこ産業株式会社代表取締役副社長

西澤 JT (日本たばこ産業株式会社) は、価値創造ビジネスを多角的に展開する「グローバル成長企業」を目指し、たばこに加え、医薬、食品を柱として、企業価値の増大に向けた事業運営を行っております。たばこ事業においては、1999年にRJRナビスコ社の米国以外の海外たばこ部門を買収し、グローバルシガレットメーカーとしてのスタートを切りました。

しかし、一昨年、WHOにより世界たばこ規制枠組み条約が制定されたことが大きく影響し、

たばこを取り巻く環境は厳しくなりつつあります。この条約には世界190カ国以上が加盟しており、2006年2月6日に、スイスのジュネーブで第1回締約国会議が行われる予定になっています。こうした環境の中で最近気になることは、たばこの煙が、たばこを吸われる方以上に吸われない方の健康を損ねるといった世間の見方です。私たちもこれまで受動喫煙が、どの程度たばこを吸われない方の健康に影響を与えるのか調査してまいりましたが、医学界においても明確な判断がなされていない状況です。ただし、たばこを吸われない方にとっては、たばこの煙や臭いが迷惑となる場合があることは十分理解しております。このような認識の下、たばこを吸われる方と吸われない方が共存できる社会を目指して、2003年に社会環境推進室という組織を新たに発足させました。

マナーの徹底と分煙された喫煙環境づくりを

西澤 各種アンケートなどを実施し、分かったことは、たばこを吸われない方の約8割が、吸われる方のマナーの悪さをたばこを

好ましく思わない理由として挙げていることです。喫煙マナーがきちんと守られ、たばこの嫌な臭いや煙が避けられるのであれば、たばこを吸うこと自体は個人の自由であるとの意見が大半でした。どうしたら約3,000万人ものたばこを吸われる方がマナーを守り、かつ吸われない方にも配慮した適切な喫煙環境を創出できるのか? 社会環境推進室では、公共の場所やオフィスなどでこういった取り組みを進めております。これまでも数多くのオフィスビルや商業施設様からお問い合わせをいただき、必要なノウハウの提供などでご協力させていただいております。しかしながら、私たちには煙の扱いに関する若干の知見はあるものの、設備設計や空間デザインのノウハウがないため、喫煙空間のつくり込みにまで踏み込むことはできておりません。

これまでも、建築業界において、喫煙環境・喫煙空間に焦点を当てて議論されたことはほとんどなかったのではないのでしょうか? この機会に、是非、みなさんと一緒に喫煙環境や喫煙空間のあり方に関して議論し、たばこを吸われる方と吸われない方の共存関係を建築の視点からも考えていけたらよいと思っています。たばこを吸われる方が快適に過ごせると共に、吸われない方との共存が図られている。

そんな理想的な空間が創出されることを期待し、この度このようなコンペを開催させていただきました。応募者の方が、設備やデザイン、空間のあり方をも含めた多様なアイデアを出していただければ幸いです。

気持ちよく吸える場所づくり

古谷 僕は昔、ハイライトを1日3箱吸うほどの喫煙者でした。禁煙してすでに15年経ちますが、たばこを吸う方の気持ちも、たばこを吸わない方の気持ちも両方分かる気がしています。かつてはチェーンスモーカーだったものですから、昔はよく打ち



古谷誠章 (ふるや・のぶあき)
1955年生まれ / 1978年早稲田大学理工学部建築学科卒業 / 1980年同大学大学院修士課程修了 / 1994年八木佐千子と共同でNASCA設立 / 現在、早稲田大学教授

合わせの前に、妹島さんとふたりしてたばこを切らさないようにまとめ買っていましたね。そういった意味では、喫煙者としてのたばこのおいしさや利点を理解できるといいますし、たばこを吸わない人がたばこの臭いや煙を不快と感じる面も理解しているつもりです。

たばこをやめても、他人のたばこの煙や臭いはそれほど気にならないのですが、新幹線の喫煙車両はちょっとどうかと思いますね。人と煙を閉じ込めて、状況をさらに悪くしてしまっていると思うんです。この密度の問題は重要だと思います。

喫煙者をひとまとめにすれば、喫煙者にとっても非喫煙者にとってもすべて問題が解決するという単純なことではない気がしています。

ではどういうところでたばこがおいしいかという、個人的には朝霧の山中で吸うのがすごくおいしく感じていましたね。おいしい空気のある気持ちのよい場所での一服はすごく心地よかったです。恐らく喫煙者それぞれが自分にとっての最高の喫煙空間を持っていると思うんです。そういう意味では、本当に気持ちよくたばこを吸える空間はどのようなものかということを考えてみることも大切なのではないのでしょうか。

密度のこと

妹島 密度という話が出ましたが、今ある喫煙スペースは非常に高密度で、リラックスという点からはかけ離れていると思います。自分でもよく使うのですが、ほとんどニコチン摂取するための空間みたいな感じがします。これから飛行機に乗るから、どうしても吸っておかなきゃとか、会議の途中で急いで行ってくるとか。楽しいという感じはなくて、なぜこんな所と思わされる環境が多いですね。

以前利用していたいなと思ったのは、チューリッヒの新しい空港に

あった喫煙所ですね。利用する人数に対してものすごく広い空間で、ゆったりしていて、ソファも置いてあって、ここだったら長い待ち時間でも、たばこを吸いながら心地よく過ごせるなあと。他にデュッセルドルフ空港もいいですね。あそこは空港内の大空間の中に小さな喫煙所が多く点在していますね。別に喫煙所が他から遮断されているわけでもないのに、排気処理を上手に行っているのでしょうか、喫煙場所とそうでない場所がうまく共存しています。

日本では、狭い場所にただ押し込められるというケースが多いですね。もし可能なら、大きな公園みたいな雰囲気の良い空間がいいです。

室内の換気も大きな問題ですね。自分で吸っていながら洋服に臭いが着くのは気になりますから、吸わない人だったらもっとも苦痛だと思います。それから部屋なんかで、他の物とたばこの臭いが混じってしまうと本当に嫌な臭いになりますよね。

古谷 喫煙室って、昔のトイレみたいに殺風景で洗練されていないものが多いでしょ。密閉されて息苦しい感じがしたりね。

妹島 そうですね。けっこうひどい環境のものもありますよね。嗜好品としてのたばこを楽しむ場という感じではなくて、機械的にたばこを吸わせるだけの部屋みたいな。そういった雰囲気や空間のデザインやつくり方で解決できたらいいですよね。

西沢 僕も喫煙者で、1日5箱吸うヘビースモーカーです。分煙空間については以前から気になっていましたが、先日行ったドイツの空港ではまだ日本のように喫煙スペースが隔離されていなくて、吸う人も吸わない人もお互いがソファでくつろげる環境となっており、いいなあと思いました。

日本にはいろんな喫煙室がありますが、設備面や環境面でいまいちというのが多いですね。基本的に密室で、樹脂系の素材と接着剤が臭気を放っていて、そこに入るのは喫煙者にとっても苦痛です。本当は、吸わない人も入りたくなるようなスペースであってほしいです。

喫煙者コミュニティ

六鹿 ヘビースモーカーだった父親のもとに生まれたのですが、それが逆に影響したのか、僕は一度もたばこを吸ったことがありません。

10数年前、アメリカで突然、たばこを吸う人たちがオフィスビルから締め出され、ビルの外構部や軒下で大勢たむろしていた時代がありました。今の日本でも、喫煙空間を設けていないビルではまったく同じような光景がよく見られますよね。

私たちの会社では部署ごとに喫煙率も異なるのですが、執務フロア内に喫煙空間を設けたり、電気集塵機を持ち込んだりなど喫煙に対する取り組みを行っております。さまざまな施設の設計に際してはそこで得た知識や経験も併せ、あるべき喫煙空間のあり方を模索しています。そういった取り組みの中で何となく分かってきたことがあるんです。喫煙場所においては大量の情報が飛び交っているということ、それも結構重要な。私の会社でも、たばこを吸わない私が知らない情報を、喫煙者の間では普通に共有されていたりします。つまり、どうやら喫煙者コミュニティのようなものが存在するらしいんですよ。部署も



妹島和世 (せじま・かずよ)
1956年生まれ / 1979年日本女子大学家政学部住居学科卒業 / 1981年同大学大学院修了 / 1987年妹島和世建築設計事務所設立 / 1995年~西沢立衛とSANAA設立 / 現在、慶應義塾大学教授

撮影：本誌写真部 中山保寛



西沢大良 (にしざわ・たいら)
1964年生まれ / 1987年東京工業大学工学部建築学科卒業 / 1993年西沢大良建築設計事務所設立 / 現在、東京理科大学、東京藝術大学他 非常勤講師



六鹿正治(ろくしか・まさはる)
1948年京都府生まれ／1971年東京
大学工学部建築学科卒業／1973年
同大学大学院修士課程修了／1978
年～日本設計／2006年4月～同社
代表取締役社長

仕事も年齢も違う人たちが、喫煙を通じたコミュニティの中でお互いの情報の交換・共有を行っているんです。ただし、喫煙者のためだけのリフレッシュ空間をつくと、そこには非喫煙者は入りづらいし、情報の輪の中に入れない。たばこを吸わない人にとって、ある種の情報遮断が発生するような状況になるんですよ。

ですから、喫煙者も非喫煙者もお互いが気持ちよく過ごせるような空間がつけるといいなと思っています。実際に私たちが以前設計した「茨城県市町村会館」(本誌0004)では、そうい

う要望があったので、大きなリフレッシュ広場をつくり、その一部分をガラスで囲った喫煙スペースとして喫煙者と非喫煙者が完全に分断されることがないような工夫をしました。

喫煙室内も外光が入り外の景色も眺められ、たばこを吸いながらリフレッシュできる空間とし、かつ一歩外に出るとたばこを吸わない人とも同じ雰囲気共有できる。

そのため、お互いの情報交換や議論も可能になり情報の偏在が発生せず、多様なコミュニケーションが生まれる素敵な場所。今回はそういうことも含め、みんながハッピーになるような空間のアイデアが出てくるといいなと思います。

栗田 同じような話は、私共も多くの企業様や研究会などで耳にします。労働生産性の向上が多くの企業で課題となっていますが、デスクワークの緊張をほぐしたり、新しいアイデアを生み出すための、気分のリフレッシュやリセットおよび情報交換の場として濃密なインフォーマルなコミュニケーションの重要性が高まっているようです。

そういったインフォーマルコミュニケーションを醸成するには偶発的な出会いの場が必要であり、喫煙スペースがその任を担っているとの認識を持たれている方は多いですね。ただ、六鹿社長がおっしゃられるように、場合によっては情報の偏在が生まれる可能性も否定できないですね。

六鹿 確かに喫煙室をつくと、そこを利用する人間は限られてくる。そして1日に何回か顔を合わせて、親しくなって、ある種の情報が部署や上下関係を越えて共有される。しかも割と重要な情報が行き交ったりするわけですね。その関係にどうやって非喫煙者を繋げていくかというのは課題ですね。



佐藤英治(さとう・えいじ)
1936年生まれ／1963年早稲田大学
理工学部建築学科卒業／1985年
イーエスアソシエイツ設立

佐藤 そういった喫煙を通じたコミュニケーションをかなり戦略的に使っているところもあるんですよ。つまり、役員フロアには、喫煙コーナーを設けない。役員は一般社員フロアの喫煙コーナーに降りて行ってたばこを吸う。

そこでは、たばこを吸う人同士のある種の連帯感があって、役職とか関係なくすぐに仲良くなってしまう。たとえばシンガポールの空港で喫煙コーナーに入ると、環境はあまりよくないんですが、必ず会話が生まれます。まったく知らない

人とも狭い場所に閉じ込められたが故の連帯感から会話をするのでですね。

設計事務所のコンペなんかでもそうですよ。喫煙者のいるチームは、いろんなところでアイデアを拾ってきているのか、さまざまな視点を持った面白い提案がなされている場合があります。それは垣根を越えて、情報交換をしているからなのかもしれませんよね。

妹島 確かにそういうことがありますね。先日、たまたま御高名

な方と、同じ会場にいて、喫煙室ではち合わせしたんです。そうしたら、「吸われるんですか？」という話が親しくなるきっかけとなり、お互いの距離感がぐっと近づきました。

たばこを楽しむ

佐藤 たばこを吸うってことは昔は楽しみだったと思うんですね。嗜好品ですから、煙をくゆらすというムードのあるひとつの楽しみです。今はそういうよさが薄れつつありますよね。喫煙者が楽しくたばこを吸える空間において、たばこを吸わない人もリラックスやリフレッシュできるような可能性はあるんだと思います。最近、喫煙者と非喫煙者を徹底的に分ける考え方が主流ではないですか？ 分けるのではなくて、お互いに自由に出入りできる場所にはできないものでしょうか。

設備技術的視点から見ると、喫煙室の環境をよくするには部屋をなるべく小さくして、できる限り換気回数を多くすることがコストもかからず早道です。ただ、現状では多くの喫煙室は、空間として魅力のない場所に追いやられており、しかも設備的に何か工夫や処理を許されるような状況にはないんです。

ただし、技術的なハードで処理するだけではなく、ソフト面での工夫や知恵出しも空間を魅力的にするのに必要ですね。

また、臭いについてですが、十分な換気を取れない部屋では、部屋中に臭いが着いてしまっこれが問題になるんです。管理の方法にもよるのですが、たとえば壁紙を張り替えるのは無理でも、あらかじめ何層かの構造にしておき、定期的の上層部を剥がして臭いと汚れを取り除くとか、そんな工夫だけでも喫煙室の環境はだいぶ変わるはずですよ。

西沢 喫煙室は共用部に設けられる場合が多いですよ。その場合、建物のコア、つまり中央部に設置されがちですが、給排気のことや喫煙者のリフレッシュなどを考慮して、半屋外に近い建物の外周回り(ペリメータ)に設置すると、設備的にも空間としても、もっと違った分煙空間がつけられる気がします。

古谷 もう少し単純に考えて、外で吸うのって気持ちがいいですよ。だから外で外気に触れながらってものに近い環境が中で再現されないかな。換気にしても、一方向で常に外気が誘引されていれば、吸う人は風下側に、吸わない人は風上側にいればそんなに煙が気にならないとかね。いろんな意味で、誰もが享受できる環境として分煙空間を考えてもらえるといいですね。

パブリックスペースについて

編集部 アイデア部門の課題は、「パブリックスペースと分煙」となっていますが、このパブリックスペースは、たばこを吸わない他者がいる場所として駅や公共施設といった街の中の場所もあれば、住宅のリビングスペースなども幅広くパブリックスペースとらえて提案していただけたらと思うのですが。

西沢 そうですね。たとえば、たった二人のスペースを考えて、吸う人と吸わない人がいるとして、その二人がどちらも快適になるようなスペースをつくったとすると、すでにパブリックスペースの条件は満たしているでしょう。人数が少なくてもパブリックとしていいと思います。肝心なことは、吸う人・吸わない人の双方にとって価値のあるアイデアを提案することでしょう。

佐藤 有料トイレがあるんだから、有料喫煙室なんてどうでしょう。数十円払えば、理想的な喫煙空間でゆったりとたばこを楽しむことができ快適な喫煙空間で吸えるみたいなの。

煙だけを分けるために

西沢 アイデア部門のテーマで「分煙」という言葉を使っていますが、「分煙」というと、それこそ男性・女性トイレのように、喫煙者を隔離したスペースをイメージしてしまう気がします。作品例部門は実例なので、「分煙空間」でもよいのですが、アイデア部門は、スモークキング「エリア」とかスモークキング「ゾーン」といった柔らかい言い方にした方がいいんじゃないかと思いました。

編集部 おっしゃられるように、「分煙」と書いてあると文字通り、分ける・分断することが前提ととらえられてしまうのは困ります。適切な言葉がなかなか見つからないのですが、まだ、世の中で、「分煙」はこういうことだという絶対的で理想的な解が存在していないものと考えています。

西沢 物理的に隔てるのではなく、混在しているけれど、吸う人も吸わない人もお互いが快適に過ごせるのが理想だと思います。

妹島 両者が共に心地よいということは要項に記載されていますから、それをどうやったら実現できるかを考えてほしいですね。なんとなく柔らかくは分けなきゃいけないとは思っていますけど。

西沢 空間的には混ざっているのに、煙はそうでないという案が出てきてほしいですね。人も煙も一挙に分断するんじゃないような案が出てくれたらと思います。

それから、念のために言いますと、安易にガラスに頼ることに気をつけてほしいです。困った時にガラスを使うというのは、20

世紀の病気で。領域に悩むと、たいいていガラスが出てくるんです。

佐藤 気流できっちり処理できるのであれば、ガラスなどの遮蔽物もいらぬ気もしますが、ガラスって便利なんですよ。最適な気流形成は、各種前提条件が崩れると成り立たなくなります。空間においては、常に人が動きますから、そうするとバランスが崩れて、想定していた気流形成が困難になります。

空間のつくり方だけでなく、僕としては難しいからこそ設備的な視点からの提案があったら面白いなと期待しています。正式にエンジニアリングできている喫煙場所ってないんじゃないですか。

古谷 そうすると「分煙」という言葉は、煙をなんとか分けようとしているわけだから、空間を考える上で結構本質的かもしれないですよ。煙は分けるけれど人を分けているわけではないと。

編集部 確かに「分煙」という言葉は、普段あまり馴染みのない言葉かもしれませんが、古谷さんが言われたように、突き詰めていくと、概念的な言葉としてとらえることができる気がしますね。

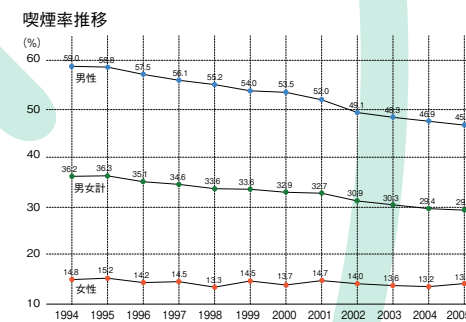
古谷 今回は、「分煙」の意味さえも真正面から掘り下げて考えてみましょうということではいかがですか。煙を分けようとしているけれど、人を分けようとしているわけじゃない。

強いて言うなら、パブリックスペースにおける喫煙のあり方を問うているわけで、たばこを吸う人と吸わない人とがどのように共存していけるのか、さまざまな視点からアイデアを出してもらえればと思います。(2006年2月1日JTにて/進行・文責:新建築編集部)

FACT SHEET

資料：1.出典JT「全国たばこ喫煙者率調査」 2.JT調べ

1.喫煙者データ(2005年6月現在)



喫煙人口

	2004年	2005年	対前年増減
男性	2,328万人	2,281万人	▲47万人
女性	704万人	739万人	+35万人
男女計	3,032万人	3,020万人	▲12万人

2.オフィスの喫煙環境(オフィスの喫煙環境の実態を明らかにする目的で、インターネットによるアンケート調査(2005年4月)を行ったもの。サンプル数8,992名*)

*うち、集計対象10名以上のオフィス6,140名

